

サケやマスを追いかけて、
かつて人びとは文化をつなげていた

海でつながる「にこいがた」

～北洋漁業と間瀬屋



主催：新潟大学地域映像アーカイブ研究センター 旧齋藤家別邸

2019年11月19日[火]～12月1日[日]

(休館日：11月25日、26日) 開館時間：9：30～17：00

旧齋藤家別邸内蔵ギャラリー

旧齋藤家別邸観覧料：一般300円 小中学生100円

住所：951-8104 新潟市中央区西大畑町576 TEL：025-210-8350

展示映像

写真：間瀬屋9代鈴木佐平『樺太漁場の思出』より

動画：5代齋藤喜十郎に撮影による16mm映画より

サケやマスを追いかけて、かつて人びとは文化をつなげていた 知られざる北方の人びととの邂逅

—アイヌ、オロック、ギリヤーク、そして白系ロシア人たち

写真： 間瀬屋9代 鈴木佐平 1932年頃 サハリン（樺太）



新潟とサケ、マスの文化

新潟における北洋漁業は、近代に入り、北前船が衰退するのによって、日本海の沿岸のロシア領のウラジオストックからニコライエフスク＝ナ＝アムレまでの沿海州や樺太、さらにはオホーツク海に面するカムチャッカ半島にまで、サケやマスを求めて出漁しました。この背景には、日清戦争（1894～1895年）以後、日本社会における人口の増加や都市の発達、さらには鉄道などの交通網の発達によって、サケやマスへの需要が全国的にひろがっていったことがあります。サケやマスが川をさかのぼる南限に位置する新潟は、縄文時代からサケ、マスを重要なタンパク源として生活してきました。北洋漁業によってこうした食生活のあり方は、日本全国へと広がっていくことになります。

陸揚げ漁業の時代

当時、北洋漁業は陸揚げ漁業と呼ばれるものでした。ロシア領でのサケ、マス漁を行うには、入札によって漁場を決めてから、漁夫と漁具だけでなく必要な日常物資を帆船、あるいは汽船に載せて漁場へと出漁することになります。船が漁場に着くと、漁夫たちは物資を陸揚げし、約2ヶ月にわたる生活に必要な宿舍や作業場をつくります。そして、その沿岸でサケ、マスを獲ると、作業場へ水揚げし、サケやマスのエラと内臓を取り出し、洗って塩を加えていき、塩蔵しました。こうした塩サケ、マスを新潟港に持ち帰り、全国へと流通させました。この現地での漁業を成功させるためにも、現地の人びととの協力が必要となります。北洋漁業は思ってもみない形で、異なった文化の人びととの交流が実現することになります。

しかし、こうした北洋漁業は、1930年代に入ると、政治情勢の変化もあり、母船式沖取りによる鮭鱒工船へと移ることになり、陸揚げ漁業は消えることになります。

旧齋藤家別邸案内図



◇旧齋藤家別邸とは

旧齋藤家別邸は、豪商齋藤家の四代齋藤喜十郎（庫吉1864～1941）が、お客様をおもてなしする別荘として大正7年（1918）に造ったものです。砂丘地形を利用した池泉回遊式の庭園と、近代和風建築の秀作といわれる開放的な建物は、大正時代における港町・商都新潟の繁栄ぶりを物語る文化遺産です。

今回の展示では、北洋漁業を経済的に支援した齋藤家の様子を撮影した、五代齋藤喜十郎などが撮影した動画も上映致します。

◇にいがた地域映像アーカイブとは

教育・研究に関わるMARUI（博物館・文書館・図書館・大学・産業界）では、書籍・絵画・古文書・動画・写真・音源などのデジタル化を行い、文化資源化することが課題となっています。新潟大学地域映像アーカイブ研究センターでは、これらの文化資源活用の効率性・利便性を高め可能性を広げていくために、広く県内全体の文化資源を一元的に管理公開するべくMALUI連携による統合型データベースを構築しました。



にいがた MALUI 連携地域データベース
<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/malui/>

詳細は、上記「にいがた MALUI 連携地域データベース」の「ご利用方法」をご覧ください。